

# くらし・家庭

文科省がスクールソーシャルワーカー活用事業を2008年度にはじめて7年が経過した。スクールソーシャルワーカーとは、社会福祉の専門家で学校や教育委員会に籍を置いて働く専門職である。

学校という空間は、教育の場であると共に、日々の子どもたちの生活空間でもある。

ところが学校にいるおどなは教育のプロである教員がほとんどで、その教育フイルターだけで子どもや家庭を見ていると、どうしても見落としてしまうことがたくさんある。

その一つは、学校に来ている子どもたちは家庭や地域の課題を背負って来ているという事実。前回のミナ

## スクールソーシャルワーカーがやってきた

②



イラスト 山岡小麦

のように外年にルーツをもつ子どもたちも地域の学校に通っている。他にも経済的な課題を抱える家庭の子、家で虐待を受けている子、発達課題を抱える子、親が病気や障がいを抱える子、母子家庭の子…。どの福祉課題も子どもが自分で解決できない

子どもの代弁者であること

子どものばかりである。

そして子どもたちはその

福祉課題の重さに気がついていないこともあるし、その課題・重さを先生や友だちに話せないときもある。その課題が原因となり学校生活で不利益を被っていることも決して少なくない。

ができるのである。

(火曜掲載)

スクールソーシャルワーカー ゆっきー

# くらし・家庭

■放課後の職員室。生徒数人が呼び出されていた。  
「なんでもみんなにきちんと謝れないかな。もう中学生になるんだろ!」  
川合先生の声が一回り大きくなる。ミナは唇をさらりにそぼっていたミナ。工房に注意され、ハラがたったからホウキをありまわして、とめにきたカズくんたちにホウキをあててしまつたのもミナ。そこにどんな理由があるのか…。

「先生、そろそろ塾があるので帰つてもいいですか」。カズくんが小さな声

ミナは、幼い頃、お母さんに連れられて日本にやつてきた。楽しかった学校はいつの頃かつらい場所になつていた…。

■放課後の職員室。生徒

①

## スクールソーシャルワーカーがやってきた

で川合先生にたずねた。エリカが「私たちは何もしないので先に帰つていいですよね」と声をかぶせる。ミナは思わず横を向いてキツとらみつけた。

ずっと黙つて聞いていたスクールソーシャルワーカーのゆき先生が「川合先生は思つたんだけど、ミナって、もしかしてあの中に謝り

つてもいい人と絶対に謝りたくない人がいるんじゃないかな?」

と言つて、ミナを廊下に連れて行つた。

「さつきからずっと見て

て思つたんだけど、ミナって、もしかしてあの中に謝り

つてもいい人がいるんじゃないかな?」

教育の場である学校に、

福祉の専門家(社会福祉士)であるスクールソーシャルワーカーがやつてきて、福祉のフィルターで子どもや家庭を見ていると教育では見えないものが見え

てくる。(火曜掲載)



イラスト 山岡小麦

子どもたちが帰つた後の職員室。「ゆき先生、なんあの子の気持ちがわかつたんですか?」

「普通に考えたら、嘘でも形だけの謝罪をすればいいわけじゃないですか。それをしないのってよっぽど謝りたくない理由があるのかな?」

スクールソーシャルワーカー ゆっきー

# くらし・家庭

2008年度にはじまったスクールソーシャルワーカー活用事業によって、現在約1500人が全国の学校など教育機関で活躍している。しかしその多くが単年度契約の非正規雇用。また、その中で社会福祉士などの国家資格取得者は半数程度である。しかも社会福祉士養成課程においてスクールソーシャルワーカーについて学ぶことはわずかである。

## スクールソーシャルワーカーがやってきた

④



イラスト 山岡小麦

ところが今年に入り、子どもの貧困対策推進法の施行から「子どもの貧困対策」のキーパーソンとして注目が高まり、8月に閣議決定された「子どもの貧困対策大綱」では5年後にはスクールソーシャルワーカーは第1回で紹介した「ささえる」役割、第3回で紹介した「つなぐ」役割がある。しかし、これからはじまる「子どもの貧困対

将来、学校現場にスクールソーシャルワーカーが当たり前にいる時代がやってくる。僕らが学校で「ささえる」「つなぐ」「つないだ」ととも期待されている。

どのような家庭の子どもでも、学校や地域という社会で、子ども時代を安全に安心して成長していくことを目指して、解決のための手だてを

(おわり)

スクールソーシャルワーカー ゆっきー

# くらし・家庭

ケイは、うれしかった。新しいお母さんに「ありがとう」と言わされたことが。今までお父さんとふたり暮らしだった。長距離トラックの運転手をしているお父さんは家に帰らない日もあった。でも夏に新しい家族ができてうちがにぎやかになった。だからケイは家族のために頑張っている。

### ■中学校のケース会議。

「1学期は休まずに来てたんですよ。でも2学期に入っちゃこちよこ体むようになったんです、彼女」。ケイの担任・玉木先生が口火を切った。その後友達関係や部活のことなどさまざまな情報交換がされたが、彼女が休む理由は見つからなかった。中学生活に頑張りすぎて息切れして休みが

## スクールソーシャルワーカーがやってきた

③



イラスト 山岡小麦

## 彼女はなぜ学校を休むのか

増えてきたのかも、しばらく様子を見ようという結論になりかけたとき、会議に呼ばれて出席していたスクールソーシャルワーカーのゆき先生が発言した。

「この子、再婚家庭ですけど、いつ再婚されたんですけど?」「夏休みですが、

■ケース会議から1カ月

すぐく仲良くなつて再婚は問題ないですよ」「この母の連れ子の2歳の子ですか?」「保育所通ってないんですね。でも先ほどお母さんは仕事をしていると報告がありましたけど、誰が日本で課題が解決することも多くのことは「つなぐ」といふことです。(火曜掲載)

後の中学校。

「ゆき先生が言った通りでしたね。お母さん、仕事の時は下の子を友達にあずけていて、都合つかない時はケイが学校休んで弟を見てたんですね」「でも市の福祉につながって、弟が保育所に通えるようになってからは、ケイさんも休まずに学校へ来られるようになつた。良かったです」

スクールソーシャルワーカーはこのように関係機関をつなぐ間接的な支援をしている。不登校やいじめなど学校に課題がありがちに見えて、実は家庭の問題を子どもが背負っていることが多くある。そしてこのよ

スクールソーシャルワーカー ゆっきー